白山麓焼畑出作り民の山地語彙　その２－狩猟中心に－

橘　　礼吉
山口一男　石川県立白山ろく民俗資料館

HUNTING VOCABULARY USED BY THE FOLK AT THE FOOT OF MT. HAKUSAN

Reikichi TACHIBANA
Ichio YAMAGUCHI, *Ishikawa Hakusan Folk Museum*

まえがき

筆者らは，白山麓焼畑出作り民の山地語彙について，農耕（焼畑）や林業（鍬の柄・雪掻板の製作，炭焼き等），さらにはハゲミモノ（山菜・木の実・薬草採取）等の生業や生活面で，山地と密度濃く関係をもってきた結果，蓄積された多くの語彙についてまとめた（橘・山口，2000）。

この報告では，「猟師」とよばれていた小集団で伝承されてきた山地語彙や，猟場地名についてまとめる。白山麓でいう猟師とは，専業的なりわいではない。積雪期，焼畑出作り民の男性は，地元を離れて出稼ぎに出る者，地元に残って木製品の鍬の柄・雪掻板・白山詣りの登山杖等を作る者に分かれる。猟師とは，地元に残った男性の中で，クマ猟をおこなう少数の者で，さらに狭義には猟銃所有者をさす。

ここでいう猟場地名とは，ツキノワグマ（以下クマと表記）猟に関するものである。白山の手取川源流域におけるクマ猟は，主として残雪期（融雪期）の雪が締まり雪上歩行がたやすくなった時期，小集団でおこなう巻狩りである。クマの巻狩りは，過疎による人口流出，猟師数の減少，職業構成の変化，娯楽の質的変遷，使用猟銃の変化等が影響して，古い形態の巻狩りは殆どみられなくなった。

伝統的な巻狩りに従事した猟師は，白峰村では白峰・桑島の二集落の集団単位，または谷筋の出作り群単位で“組”を作っておこなっていた。それぞれの組は，自己の生産・生活領域内の山地範囲内に位置する猟場で狩りをした。補足すれば，猟師は白峰村山地のどこでも狩猟ができたわけでなかった。例えば三ッ谷出作り群の猟場は，牛首川左岸支谷の小三ッ谷が白峰本村との境界，岩屋俣谷と東俣谷の分水嶺尾根が市ノ瀬出作り群との境界であった。赤岩出作り群の猟場は，牛首川右岸支谷の宮谷が白峰村本村との境界，湯の谷が市ノ瀬出作り群との境界であった。時には，近隣の出作り群・組と合同で人数を増やすと同時に，猟場域を拡大しておこなう場合もあった。殆どは日帰り猟で，「一日三倉（みくら）」という慣用語彙のように，一日三か所の猟場で巻狩りをすることを目安としていた。

白山のクマの巻狩りは，端的には東北地方のマタギがおこなっていた小集団による共同狩猟に似ている。猟場は通称「クラ（倉）」とよぶ。クラには固有名称がある。この猟場名称すなわち猟場地名は，組が自己領域内のクラに名称をつけ，さらにその名称は近隣の組にも使われて次第に猟師間に普遍化され，次に地名化するという経過をたどってきたと推察される。クラとは，本来岩場や露出した巨岩を意味する。猟師のいうクラは，下部に急峻な傾斜地または岩場があり，その上部は尾根に連なっている場所である。その植生は，岩場にはヒノキ・ヒメコマツ等の針葉樹やシャクナゲ・イヌツゲ等の常緑樹等が散在し，上部の尾根やその周辺にはブナ・ナラ（コナラ・ミズナラ）等の広葉樹林が広がっている。

猟場は，クラばかりでなく，「ナーバタ」または「ナバタ」とよばれる草地も含まれる。谷筋の雪崩堆積地や雪の吹き留り地は，長期間残雪があり，ハクサンアザミ・ミヤマシシウド・ザゼンソウ等が自生する草地となり，いわゆる高茎草原である。この

ナーバタは，クマの餌場となるが，猟師のいう「ヒラケタナーバタ」は人間の視界に入り易く，クマは長い時間とどまらない。この猟場には固有名称がつく事例はクラ程ではなく少ない。その理由は，ナーバタ猟は，クラの巻狩りより少ない構成人数，時には単独でおこなわれるためであろう。

白峰村白峰の左屏（さへい）公一氏（昭和 6 年生）は，白峰郵便局の郵便配達を生涯の仕事としてやり遂げられた人で，集落・出作り群の全戸数と面識・交流があった。趣味として猟銃猟をたしなみその腕前が上級であったので，所属する白峰組以外の他組よりクマ猟への誘いがあり，残雪期の休日は全部狩りに費やされた。結果的に，各狩猟組からの勧誘で，白峰村領域内の全猟場でクマ猟をした。この事実に水野・花井（1983）は注目し，左屏氏手書きのクラ分布図をもとに白峰村のクラの分布図をとりまとめた。

左屏氏のクラ分布図は，白峰村地域内の全猟場での体験を礎に，国土地理院の地図にたよらず，まったくの手書きである。この図には，クラの固有名称が残すことなく網羅されて記録され，巻狩り全盛時代に，広大な白山の山地のどの場所で巻狩りがおこなわれていたかが分り，貴重である。

ここでは，水野・花井（1983）に比べ，より正確にクラの位置を把握して記録することを意図した。具体的には，筆者らが左屏氏の記憶・体験をよみがえらせ，国土地理院 2 万 5 千分の 1 地形図にクラの位置・ひろがりを書きこんだ。と同時に，印象に残ったクラ，それぞれのクラの特色，良く獲れたクラ・獲れないクラ等についても口述を受け記録した。個々のクラの説明については，猟師間で使用してきた狩猟語彙とでもいうべきものが多々でてきたので，「猟場に関する語彙」としてまとめた。ここで紹介する語彙は，東北地方のマタギが，狩猟時だけに使用する「山言葉」とは性格を異にするもので，白山麓の巻狩りの技術用語のような性格のものである。

猟場に関する語彙

イップクバ：一服場。クマが山中を移り歩く時，一休みする場所（宿泊はしない）。例としては，湯の谷右岸の人足平，鳩（ハット）の湯，小三ッ谷のタノヘラ，牛首川右岸の奥カラサマ，カラサマ等。

ウチバ：撃ち場。谷から追いあげたクマを尾根で待ち鉄砲で仕留める際，射ち手が射撃する場所。クマも人間も，尾根を跨ぐように越す時は最低場所を通る習性がある。そこで，撃ち場はクマの予想通過場所を選ぶので固定化する傾向となり固有名がつく。

イシウチバ：石撃ち場。目附（メッコ）谷左岸のタツガシラにあり，尾根上に巨岩があるのが名称由来。

ソウスケノマのウチバ：牛首川左岸の五郎四郎（ゴロシロ）・平左衛門（ヘイザエモン）等のクラを一緒にして巻狩りした時の撃ち場で，ノマ（小さい急沢）最源流地でクマを待つ。

ニシキウチバ：目附谷左岸のタツガシラにある。タツガシラにはイシウチバとニシキウチバの二つがあるが，ニシキウチバの方でよく獲れた。

ブナウチバ：大杉谷左岸の奥シゲジ・シゲジ・棚倉では，ブナにクマがつく。撃ち場も大きなブナの木陰を選ぶ。

ヒノキウチバ：根倉谷左岸の桧倉は撃ち場に桧があるので猟場名となった。

エーグラ：餌倉。口述では，「湯の谷のショウブ山は良いエーグラで，メガヤ・アザミ・オオウド（シシウド）等が多く生えクマがつく。10回行くと 5 回とれる」，また「ジョーゼンは巻クラでなく，エーグラでメスのブナが多くその花を食いにくるクマをとる」等のように使う。このようにエーグラとは，谷筋に沿った草地のナーバタとは違った緩傾斜地の広い草地，さらにはブナ林を指し，クマの餌場を意味している。人によってはエサグラともいう。

クラ：倉。マキグラの略語。クマを下の斜面より追いあげ上部の尾根で仕留める猟場をさす。

クラのアタマ：倉の頭。クラの上部，時として最高部をさす時もある。

クラのクロバ：倉の黒葉。クラに自生するヒノキ・スギ・ヒメコマツ・シャクナゲ・イヌツゲ等の常緑樹をクロバという。「クマがクロバに入った」等という。

クラのシリ：倉の尻。クラの下部・最低部で谷川筋になる。クラのシリがナーバタにつながっていると最良の猟場である。

カラスクラ：空巣倉。クマが居ることが確実でも，ものすごい急な岩場なので技術的に獲るのが難しいクラ。大嵐谷の鎧が該当する。

カンクラ：クラの露岩・岩場に草木がまったく生えていない様相をさす。マキクラ全域がカンクラ状であれば猟師は登れないから猟場にならない。

湯の谷のカン倉が該当する。クラは，カンクラの所もあれば，針葉樹・低木・草が斑点状に生えているところもある。

クスボッタクラ：クラにクロバが多いので相互の見通し，いわゆる視界が良くないのでクマの動きを把握しにくいクラ。獲りそこねたクマは本能的にクスボッタクラに逃げ込む習性がある。三ッ谷西俣谷の黒壁，根倉谷の桧倉が該当する。

ダラナガイクラ：水平的距離というか，水平的広がりの非常に横広のクラ。例としては，小嵐谷の長巻がある。セコが大勢必要となる。

トウリクラ：通り倉。地形的，植生上もクラであるが，足跡を見つけて巻狩りをしても獲れないクラをさす。クマが通り過ぎるクラで，寝泊りしないクラ。該当には牛首川左岸のセンジャガ倉やガッパ等である。

トマリクラ：泊まり倉。トウリクラの対語で，クマが寝泊りするクラを指す。いわゆる普通に巻狩りをするクラをいう。

テリクラ：照り倉。メガヤの芽吹きは，アザミ・ウド等より早く，野草の中では最初に芽吹く。冬眠よりさめたクマは，日差しの良く当るクラで，メガヤが自生する場所を選んで新芽を食い，その後日光にあたって短時間昼寝する。だから晴天が続いた春先は，テリクラとよばれる日当りが良く，そしてメガヤの自生地を対象として巻狩りをした。該当は湯の谷右岸の大倉，別山谷右岸の汁鍋日向である。

フリクラ：降り倉。春先，冷たい雨・みぞれ・雪が降り続く時がある。この時，クマは雨宿りするように，雨足を弱めてくれる常緑樹の多い場所，岩が庇状になっている岩場や岩陰に居つく。だから雨天が続いた後は，フリクラとよばれる，常緑樹・岩穴の多いクラで巻狩りした。該当例は湯の谷右岸サヨモ谷，別山谷左岸の汁鍋陰地，風嵐谷右岸の蔦倉等である。

ホングラ：本倉。マキグラと同意語。クラとつく語彙には，エーグラ，カラスクラ，トウリクラ等があるが，これらは普遍的な巻狩り猟とは少しずれている。例えば「このクラは，通りクラでなく巻狩りをするホングラや」のように使う。ホングラとは，本当のクラ，普通の巻狩り猟場という意味らしい。

マキグラ：巻き倉。小集団でおこなうクマの巻狩りをするクラを指す。略してクラともいう。

ケンブツバ：見物場。周辺山地の白い雪斜面を観察してクマを発見する最適地は限られる。四方の山・谷が一望できる最適地の山頂や尾根をさす。該当は東俣谷右岸のベット岩上部の1,578mの独標点で，ケンブツバの地名がついている。チブリ小屋の位置は，猟師はフキムケ（吹向け）といい，別山谷周辺のケンブツバとしている。ケンブツバでは，２・３時間もかけて観察する時もある。

クマンバ：熊ん場。白峰村桑島では，クマが密度濃く生棲する場所を指し，「河内はクマンバである」「苛原の出作りはクマンバの中にある」等と使う。尾添では，白峰でいうケンブツバをクマンバという。事例として中ノ川右岸カンバのクマンバ，丸石谷ハバン谷のクマンバ，アカヌケのクマンバがある。尾添では，時としてクマンバを撃ち場としている。

タイジョウバ：巻狩りをしているクラを，谷の対岸で見晴らしの良い場所を選びクマの動きを見張り，狩り全体を指図する場所，またはその役。大声で指図したり，声を出せない時は大きい身振りで指図する。事例として，湯の谷右岸釈迦岳の大倉の巻狩りでは，左岸のカン倉の下をタイジョウバとする。

ナーバタ：菜畑。白山麓では茎・葉・根を食べる野菜すなわちダイコン・カブラを総称して「ナ」というが，猟師のいう「ナ」とは，アザミ（ハクサンアザミ）・ウド・オオウド（シシウド）・ウシノクチヤ（ザゼンソウ・ミズバショウの総称）・オオゼリ（シャク）・メガヤ等，クマが好んで食べる野草を総称している。クマはウシノクチヤは花，メガヤは新芽を食べている。バタは，焼畑，菜薙（ななぎ）畑のように畑をさす。だから，ナーバタとは，アザミ・ウド・ウシノクチヤ・メガヤ等の群生地で，野草畑を呈している所である。固有名がつく場合はクマが多く出没する群生地である。該当には，岩屋俣谷オハコヤのナーバタ，市ノ瀬の山田屋のナーバタ等がある。白峰ではナーバタと引張るが，尾添ではナバタ，中宮ではナバタケとよび幾分の地域差がある。

ヤスンバ：休場。ヤスンバには，人間の背負運搬時の休憩所と，クマの獣道途中の休場の二つがあり，ここでは後者。クマが移動の途中必ずといってもよい程休む場所で，足跡を見つけても猟はしない。岩屋俣谷の別山谷出合付近は，ヤスンバ・奥ヤスンバと地名化している。またこの場所は，良いナ

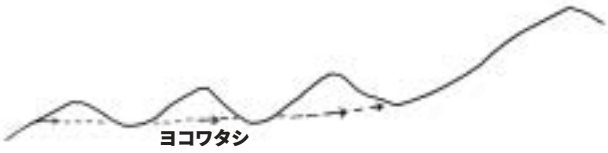


図１　横渡し略図

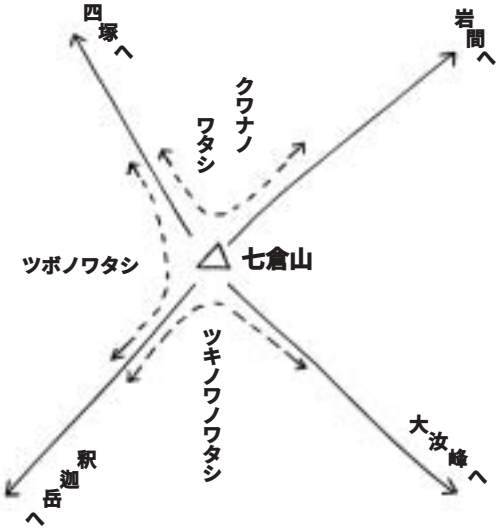


図２　七倉山のワタシ略図

ーバタでもある。クマは，瞬時ちょっと休んで，ナーバタの餌を食い，すぐ動く場所らしい。

ヨコワタシ：横渡し。積雪期のクマ猟で，尾根伝いのルートに小峰が幾つも連なった地形では，登り下りに多くの労力がかかる。そこで，尾根筋のコースを避け，斜面を横切っていくコースをとって，時間・労力を少なくする。事例は，尾添の猟師は加賀禅定道の口長倉～奥長倉に小峰が連なるので，立屋谷の谷側斜面を横切っていく。この残雪期の狩猟ルートを「立屋（タチヤ）の横渡し」といい，地名化していた。登山技術でいうトラバースをする場所の地名である（図１参照）。

ワタシ：渡し。横渡しの略で，尾添のヨコワタシを白峰ではワタシといい，猟師間では地名化している。事例として，七倉山北面の「クワナノワタシ」，七倉山西面の「ツボノワタシ」，七倉山南面の「ツキノワノワタシ」がある（図２参照）。

猟場の分布

猟場は地形図に書きこむことによって，具体的場所を記録することができた（図４巻末）。個々の猟場の特色については一覧表にまとめた（表１～表３）。摘要欄の内容は，左屏公一氏の口述を礎に，織田捷二，加藤一雄，加藤隆夫，笹木辰男，尾田清正，尾田好雄氏の情報提供で普遍性を計った。

猟場地名の特色

聞き取りと地形図に地名を書きこむ作業の結果，白峰村の猟師集団が活動した領域内（尾口村・福井県側も含む）では，マキグラ系は白峰村領域内86，尾口村領域内８，福井県側７，計101。ナーバタ系は白峰村領域内42，尾口村２，計44で合計145か所の狩猟地名を把握することができた。これは水野・花井（1983）の記録に新たに59か所を加えたことになる。

猟場は，セコがよじ登れる岩場すなわちクラ（倉）であるため，まず第一にその“壁”を指す地名がある。次の第二にはクマの良い隠れ場があったり，餌が多かったりした急傾斜地，補足すれば壁でないが巻狩りができる場所も「クラ」をつけている。すなわち「倉」地名は，「岩壁」そのものと，他方「巻き倉」として猟場の二つを意味している。当然の結果として猟場地名で最も多いのは倉のついた地名で棚倉・コベガ倉・笹倉等21例があった。次いで，天狗壁・水晶壁・青森壁等，壁をつけた地名が12例。同じような意味で，イモ岩・ベット岩・ジョージ岩等，岩をつけた地名３例があった。

マキグラ地名の傾向として，人名・屋号を冠せたものが21例と多く，次いで植物名を冠せたものが多い。

１　屋号・人名を冠せたもの

事例には，湯の谷出合の「山田屋のナーバタ」や，湯の谷右岸の「佐右衛門谷（サヨモ）のホングラ」がある。山田屋のナーバタは，旧白山温泉山田屋に隣接していたのが名称由来である。サヨモ谷は，出作り経営者佐右衛門の屋号が由来したと思われる。湯の谷最奥の出作りは，サヨモ谷より約1.5㎞上流の源司（ゲンジ）小右衛門（コヨモ）山で，夏も冬も生活していた永住出作り地で，標高は約1,230m。この小右衛門家の出作り地は，「ショウブ山のエーグラ」と隣り合わせで，このシ

ョウブ山のエーグラは，毎年石川県白山自然保護センターが実施するクマ観察会のフィールドである。湯の谷最奥の永住出作り小右衛門家と佐右衛門谷の間には，人足平・鷲の巣の猟場がある。このように，出作り地やその生業地とクマ生息地が共存している時，地元では「わしらはクマンバの中におる」と表現している。クマンバとは「熊場」で，クマの生息地をさしている。

同じように，クマンバと出作り群が共存している実態の中で，出作り家の屋号が猟場地名となった事例に，三ッ谷川出合のクラ「豊右衛門（ブンニョモン）の天狗壁」がある。地名由来は，「三ッ谷の豊右衛門は，厳冬期のブナ林で鍬の柄や雪掻板を作る時，頑強な体力の持主で他人と共同作業をせず，常時単独で仕事をしていた。仕事から帰ると，出作り対岸の岩壁にすむ天狗（山の神らしい）に合掌してお礼をしていた」という語り継がれた実在出作り家の屋号が，壁名なかんずく猟場地名となったものである。

下田原川の上流左岸「兵井（ヒョウイ）の向壁（ムカイカベ）」の由来は簡単明瞭で，右岸にあった出作り兵井家の対岸の岩壁という意味である。

屋号猟場地名は，湯の谷・三ッ谷川・下田原の事例のように，クマンバと出作り地が共存するため，猟場に近い居住所すなわち出作り家の屋号に因んだものが多いのである。クマンバと出作り地が共存する最大理由は，焼畑休閑地のせいである。出作りは焼畑雑穀栽培を経営する。焼畑とは，山地の草木を切倒しそれを焼きつくして旧来の植生を絶やして農地を造成する。４，５年耕作し，その後は休閑して植生の回復を待つシステムである。休閑地の最初数年間は，草も木も裸地に繁茂の第1歩として根付いた直後で，芽・葉・根・花・実も柔らかくて水々しい。これはクマにとって最良のナーバタである。また，裸地にはオバル（ミヤマカワラハンノキ）やウツギ（タニウツギ）が生えてくる。背の低いこれらの潅木にはヤマブドウやアケビ等がからみついて多くの実をつける。これはクマにとって格好のエーグラである。焼畑の休閑地が，クマの居住環境にとって，プラスに作用していたと考えられる。因みに，白峰村領域山中には出作り戸数322戸（昭和初期，全戸数の47％）が存在し，焼畑地と休閑地を循環させていた。

また，猟師の個人名らしいものを冠せたものがあり，例として目附谷の「新太郎」，「半右衛門（ハンニョモン）オトシ」がある。二つは焼畑の高度限界をこえた場所にあり，出作り経験者のものではない。「猟師個人名をつけた猟場」と確定できるのに「捷二（ショウジ）泣キ」という非常に小さいクラが該当する。これは，白峰在住の織田捷二氏（昭和17年生）の名をつけたものである。彼は30歳半ばに猟銃を所持するまで，一般的に猟師がたどるセコ役を務めてきた。猟師の組に入ってセコを始めて間もなく集落に近く，牛首川右岸のクラで，鉄砲撃ちが松の根元に隠れ入ったクマを撃った。弾は急所を外れたのでクマは，セコ役の捷二の真正面に向って物凄い勢いで逃げた。皆はゴム長靴を履いていたが彼は当時としてはハイカラなスキー靴を履いていたので機敏に動けず，あわてふためいて逃げて助かった。顔は泣き面で血の気がなかったので，先輩猟師はこのクラを「捷二泣キ」と命名した。

関連して織田捷二氏の名前をとったマキグラの別称を紹介する。

捷二マキースバルオンジの別称　28歳のセコ役の時，風嵐谷スバルの巻狩りでの実話。前日クマの足跡を発見したので，雨降りだが巻くことにした。尾根の撃ち場に鉄砲撃ちが登りつく迄時間がかかる。彼は巨岩の陰を利用して雨宿りをしながら「始め」の鉄砲合図を待つ間，ついつい居眠りをしてしまった。鉄砲音を聞き彼はセコ役を始めクラを登り始めた。彼の気付いた鉄砲音はクマを撃った音で，既に猟は終わってしまっていた。皆は彼が登ってこないで，クマならぬ捷二を探すため全員でスバルオンジを巻いて探した。この件以来，白峰の猟師の中には，マキグラ・スバルを「捷二マキ」の別名で使う人がいる。

捷二帰シーコジャガ壁の別称　23歳か24歳の時，明谷左岸のコジョガ壁でセコ役をした時の実話。セコ役をあてがわれ壁を登り始めた。天候が激変し強い西風となり，雨水が壁の表面を滝のように下り，壁は濡れて足が滑る。彼は猟が中止されたと判断し，壁を下って帰ってしまった。撃ち場の鉄砲撃ちは彼が登ってこないので，雨風で遭難したらしいとして壁を探したが発見できなかった。彼はいない筈で，セコ役を放棄して帰った後だからである。白峰の猟師は，コジョガ壁を別名「捷二帰シ」とよんでいる。

織田捷二氏は，２回も大失態を演じたから組外れにされても当然なのだが，処置はなかった。猟師仲間の回顧では「憎めない好人物」で，仲間の誰からも親近感を持たれる人格で，大成して村会議員に多選されている。豊右衛門，捷二のように個人名の付

いた猟場は，地域の人々により愛されていた猟師，何か勝れた能力の持主で地域の人より親愛され，または尊敬されていた人柄を顕彰する意味あいが含まれていそうである。

2　優勢植生を表したもの

該当例として，岩屋俣谷右岸の樅倉，根倉谷左岸の桧倉，風嵐谷右岸の蔦倉，牛首川右岸・キャーノキ（欅の訛ったもの），下田原右岸の松尾，明谷の松倉，大嵐谷右岸の笹倉，三谷西俣谷右岸の柳（ヤナ）が倉等８例で，周辺の優勢樹を端的に表している。

3　地形相や規模を表したもの

地形相を表したものとしては，三ッ谷東俣谷・鱒止やワレズ，風嵐谷・スバル（三つの語彙の意味内容は「猟場一覧」の摘要欄を参照）。さらには小嵐谷の長巻は水平方向に長く広がる様を，赤谷の石倉，小又谷の土倉，赤谷の赤倉，三谷西俣谷の黒壁等は，倉の形質を表している。規模を表したものには，湯の谷右岸の大倉，三ッ谷西俣谷左岸の小倉等がある。

4　動物名を冠せたもの

該当例としては，湯の谷右岸の鷲の巣・鳩（ハット）の湯，柳谷右岸の猿壁，風嵐谷左岸の狐が倉，福井県側の烏壁等がある。

5　成功確率の高さをあらわしたもの

別山谷最奥の汁鍋・奥汁鍋は，この場所へ出かけると，「必ず」と言って良い程，クマを射とめてクマ汁ができるという意味である。吹向き（チブリ避難小屋立地場所）の上部付近がトガ（オオシラビソ）の森林限界で，これより以高地はハイマツ帯となる。積雪期にはハイマツは雪に完全に埋まり真白の雪面となる。だから，吹向き・奥汁鍋以高地は，クマが居ついたり，隠れたりする樹木の根元や木陰がない。さらに真白の雪斜面に黒色のクマは発見され易く，危険度も高い。クマは，より高い場所へ行こうにも環境条件が悪くなるので，汁鍋はクマの行き止まり場所なのである。

関連して，大道谷支谷苅安谷の源頭尾根を越えた福井県側（現在の谷トンネル福井県側口）に，「汁鍋」という猟場があったが，効率良くクマがとれたのかどうかについては，確認できなかった。

猟場の地理的ひろがり

猟場の分布を垂直的なひろがりの中で見ると，最高地点は標高2,000mに程近い場所である。撃ち場は，場所によっては巻き倉の最高場所が選ばれることがある。該当例には，湯の谷奥地，白山釈迦岳東面の大倉の撃ち場で約1,950m，隣のアラネ・丸石谷の滝の猟場最高地もほぼ1,950mである。次に高いのは，別山谷の奥汁鍋，柳谷の支谷赤谷のシゲジは約1,900mである。

さらには，大杉谷シゲジの1,750m，目附谷・水晶壁の1,700m等が高い位置にある。

標高1,500～2,000mにかけてのクラやエーグラは，猟期の３月下旬より４・５月にかけて，急傾斜地・岩場の雪・水分は，夜間から早朝にかけて固く氷化してしまう。さらに北斜面では日当りが悪く，午前中は氷化したままである。このような氷雪条件と急峻なクラ地形で猟をする時は，３本爪のカナカンジキ（登山でいうアイゼン）と杖コシキ（ピッケルのような役目をする）を使っていたが，同時に登山技術でいう高い雪氷技術を修得していなければならない。マタギの狩猟で知られる秋田県阿仁町の猟場高度については，地域最高峰森吉山が標高1,454mだから，猟場はそれより高い場所にあったとは思われない。白山麓の猟場は，阿仁町のマタギ猟より高い山地であった。しかし石川県は，秋田県より緯度上は南に位置する。標高と緯度の二つの条件を考慮すると，白山麓白峰村と秋田県阿仁町の猟師組は，ほぼ同じような雪氷条件の傾斜地で，高度な雪氷技術を身につけ，雪斜面の直登やトラバースをしなければ，クマはとれなかった。猟師は，勝れたクライマーであった。

猟場の水平的分布は，基本的に白峰村の行政域内にひろがる。ところが行政域の境界線すなわち分水嶺を越えて，慣行上は「してはいけない」他町村内の行政域へ出むいて越境猟をしていた。越境猟が恒常化すると，白峰村の猟師集団が，縄張り圏外に私的に猟場地名をつけることになる。越境猟の領域は，現在（平成16年５月）の行政地名では石川県尾口村尾添地内の目附谷源流域と，福井県勝山市北谷地内である。

目附谷源流域は，尾添の猟師組の猟場であるが，白峰・桑島の猟師組が不文律を破って，遠距離を克服して出かけている。苦労して遠くへ出むくのは，苦労の甲斐があって自村領域より効率良くクマがと

れたのである。多量積雪は，雪上歩行の障害となる潅木を埋めてしまうので，目的地まで最短直線歩行が可能となり，その技術をもちあわしていたので重い負担でなかった。目附谷では，タツガシラ・兜・清水谷（虹滝）・水晶壁等が効率が良かったという。天候の安定を見定めて一泊または二泊を予定した時は，宿泊地の選定にあたって，越境猟が発覚した時は急ぎ退去，逃散し易い場所，具体的には鳴谷峠を少し下った「彦兵衛（ヒコベエ）のナーバタ」を宿泊地に選んでいた。

福井県側への越境猟は，三ッ谷・大道谷の猟師組が出かけていた。猟で，クマが県境分水嶺を越えて逃げ，その隠れ先のクラが，足跡や血痕探査ではっきりとした時は，越境猟の口実ができたとして，臆することなく出むいていた。

白峰村の猟場分布図解説

巻狩りができるのには，幾つかの地形条件があった。換言すれば，巻狩りが成立するには地形上の制約をうけていた（図３）。通常のマキグラは，(1)のような単純な平滑斜面で，撃ち場は尾根筋に設ける。(2)のような斜面の場合の撃ち場は，傾斜の遷移点を選ぶ。事例として釈迦岳東面の大倉，湯の谷右岸のサヨモ谷等がある。

谷壁傾斜の緩い谷では，クマが居つく場所があっても巻狩りはしなかった。(3)のような地形では，クマを谷壁で発見しても，傾斜が緩く垂直方向・水平方向，いずれへも逃げ易い。そして，逃げていく範囲も広く，退路が拡散してしまう。事例として牛首川本流右岸，宮谷出合より湯の谷出合までの山地斜面で，地形が緩やかなので猟場にならず，ただ一

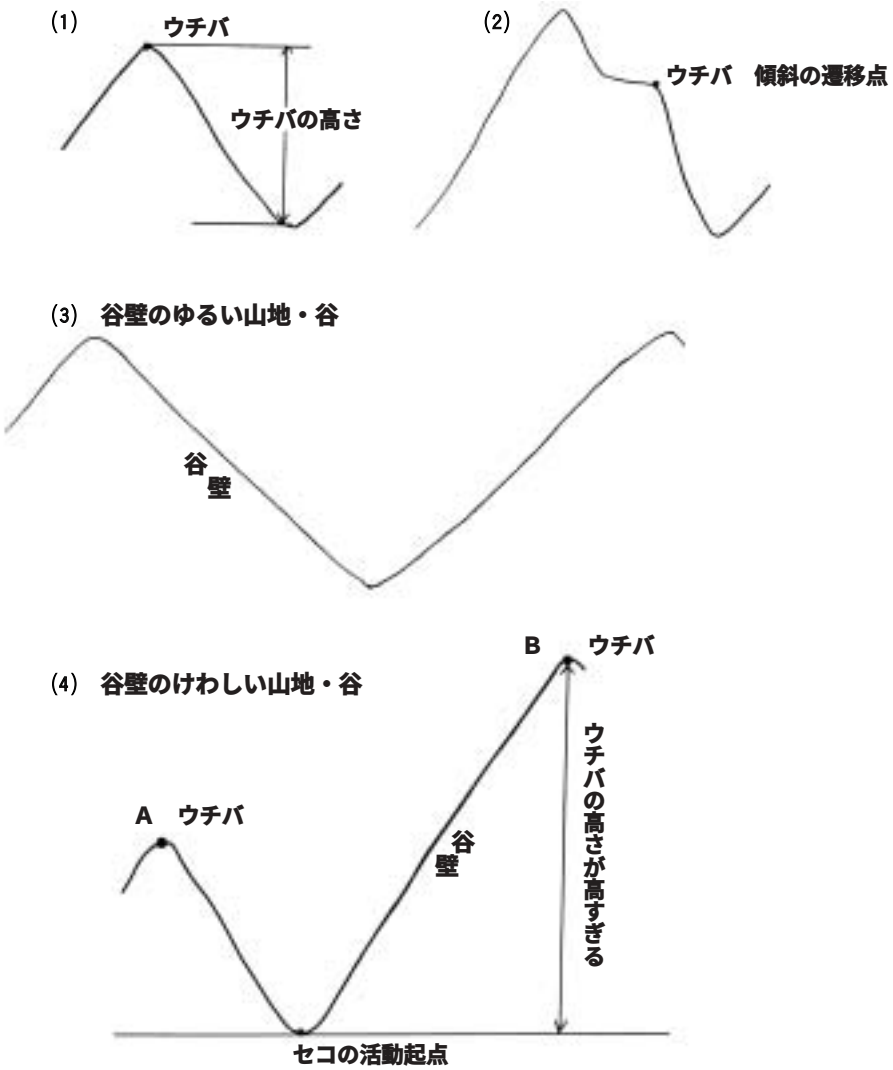


図３　猟場マキグラの地形条件

か所コベが壁という小さいマキグラがある。同じ地形的条件の三ツ谷・中の俣には，入口に「名前のないマキグラ」があるにすぎない。

谷壁傾斜が険しいとマキグラとして猟をするが，撃ち場が高すぎると巻狩りには適しない。セコが追いあげる起点と撃ち場の標高差を「撃ち場の高さ」と命名し，(4)のＡ，Ｂを比較すると，Ｂは撃ち場の高さが高過ぎる地形である。撃ち場の高さが高過ぎるマキグラは，クマがセコに追われて撃ち場に達するのに時間が長くかかる。その長い時間帯に，クマは谷壁を横に伝って逃げる機会を多くもつことになり，猟の効率は悪くなってしまう。例として，牛首川本流，河川敷に百万貫の岩がある地点の右岸谷壁が該当する。右岸は谷壁が高く撃ち場が高過ぎとなるので，マキグラ条件は良くない。それが影響し，猟場は３か所と少ない。対するに左岸は，地形上撃ち場の高さは200～300m位で，マキグラ条件が最良なので，ガッパより下流方向に７か所連続して猟場が分布していた。

効率の良いマキグラとして別山谷の汁鍋は，別山谷を挟んで右岸・左岸にまたがっていた著名猟場である。撃ち場の高さは日向斜面で約300m，日陰斜面で約250mである。手取川本流源流域のマキグラの高さは，約350mが最高限度である。三ッ谷・東俣谷のワレズ，大杉谷の七木場，大嵐谷の東バタとキャーデン，小嵐谷の長巻,目附谷のタツガシラ等が該当する。白峰村のマキグラの好適条件の一つとしての撃ち場の高さは，約250mかもしれない。

あとがき

焼畑が山地のどこでも可能なわけではなかったように，「クマ猟は広大な奥山のどこでも可能なわけではなかったのでないか」という仮説をたて，白峰村の猟場を２万５千分の１地形図に，その場所を特定する作業をした。

白峰村白峰は，白山から源を発する手取川本流の最奥部に位置し，白峰最奥の山地は国有地や白山比咩神社地である。白峰村の人々は居住地より白山頂上まで続く広大な奥山領域を，その所有がどこに属するかにかかわらず，また行政のネットが奥山に浸透する時期まで，薬用高山植物，ブナ・ミズナラ林，クマ・ウサギ等の野生動物等の資源を，自由滑脱に広大な山野をかけめぐって活用してきた。昭和30年代後半の経済高度成長期・エネルギー革命期には，山の機能・山村は急激に衰退し始める。

白山奥山の焼畑出作り民が，昭和30年代前半以前に「山」のもつ資源性を最大限に活用した時代のクマ猟場を，この作業で具体的に把握できたと思う。現在，巻狩りは殆どされなくなったので，これら猟場地名は歴史的地名となることは必定である。山地資源の無雪期利用としては焼畑がある。積雪期利用としては木製品作り（鍬の柄・除雪板）や狩猟がある。本調査は，積雪期融雪期の奥山の人々と山地とのかかわり方の生態誌の一端になれば幸いである。

調査には多くの方々より貴重な情報の御教示を受けた。地図に猟場地名をおとしていく作業では，猟場地名消失は秒読みという切迫した事情もあり，しつこく聞取りしたので失礼のむきもあったと自省している。世話になった方々は次の通りである（敬称略）。

加藤一雄（昭和３年生）　笹木辰男（昭和３年生）
左屏公一（昭和６年生）　尾田清正（昭和６年生）
尾田好雄（昭和８年生）　加藤隆夫（昭和16年生）
織田捷二（昭和17年生）　笹木　昇（昭和32年生）

なお研究費については，白山自然保護調査研究会の委託研究費を充当させていただいた。あわせて感謝の意を表する次第である。

文　献

太田雄治（1979）消えゆく山人の記録マタギ．翠楊社．
加藤助参（1935）白山麓に於ける出作の研究．京大農業経済論集第1輯，京都大学農学部，245－351.
田口洋美（1999）マタギを追う旅－ブナ林の狩りと生活－．慶友社．
橘　礼吉・山口一男（2000）白山麓焼畑出作り民の山地語彙その１－地形を中心に－．石川県白山自然保護センター研究報告，**27**，37－48.
水野昭憲・花井正光（1983）手取川上流域におけるツキノワグマの狩猟形態とその変化．石川県白山自然保護センター研究報告，**9**，85－94.
森　　俊（1997）猟の記憶．桂書房．

表１　白峰村の猟師が出むいた猟場一覧　その１

谷筋		マキグラ（ホングラ・トマリグラ）	ナーバタ（エーグラ･ヤスンバを含む）	摘要
谷名	左岸・右岸			
別山谷	右	汁鍋（シルナベ）ヒナタ		このクラではクマが効率良くとれるので，クマ汁ができやすい猟場という意味。トガ・モミ等の立ちあがる木はこのクラまで生える。以高地はハイマツが生え冬場は雪に埋もれ真白の斜面となり，クマは見つかりやすいのでいかない。トガ・モミ等のクロバはクマが隠れやすい。 オンジは人は登れるが，ヒナタは人は登れない。オトシカベ猟をする。 猟場へは夏道コースはとらない。車道経由で別当出合へ行きチブリ小屋めがけて真登して猟場へいく。
	左	〃　オンジ		
			吹向（フキム）けのケンブツバ	チブリ小屋の場所。見晴らしが良く見物場とする。吹向けとは，風の通り道を意味する語彙。
	左	奥汁鍋		汁鍋より逃げたクマが隠れる。別山谷最奥の猟場。
岩屋俣谷	右		樅倉（モミクラ）　エーグラ	谷川筋にナーバタ，斜面下半部はブナ。クマにとっては山菜のナもあり，ブナの新芽･花もあり，木穴の隠れ場もあり，最良のエーグラ。ブナについたクマをとる時もあれば，巻狩りでとる時もある。トメウチバにネゾレのトガが一本ある。
	右		奥樅倉　エーグラ	小学生が猟に同行し，谷筋でウケ役をしていて谷川に落ち，滝つぼで水死した猟場。
	右		トツサカ　エーグラ	ナーバタの上に壁。壁はアカヌケ（山崩れ）もあればイシナのガンバンの所もあり，ガンバンの尾根にはマツがチョロチョロあるが，全体にブナが多く生える。エーグラでクマを見つけると巻いてとる。
	左		奥休場（オクヤスンバ）	移動途中のクマが一服する所。足跡があっても猟はしない。
	左		休場	一度だけとったことがある。（笹木辰男氏）
	左		オハコヤ　ヤスンバ	クマがとれなかった狩りの帰途，ヤスンバは人間が山菜をとる場所でもある。
東俣谷	右	ベット岩ヒナタ		一つのマキグラにヒナタ・オンジのつく場合は，谷を挟んで両岸に猟場があるときである。ヒナタ（日向）は日がよくあたる南向きや東向きの斜面，オンジ（陰地）は日あたりの良くない斜面。これ以奥は真白な斜面になる。 シルナベと同じ植生条件でよくとれるクラ。越前より逃げて山越えしたクマが隠れこむ場所。非常に険しくセコにとって恐ろしいクラ。
	左	〃　オンジ		
	右	ワレズ		谷口で二つに分かれる谷をワレズというらしい。東俣谷右岸は岩屋俣谷左岸と比べ地形が緩く，狩りがしやすく，割と効率が良くクマがとれた。
	左	鱒止（マスドメ）		谷川の幅全体が滝となっていて魚止地形となっていたが，現在は発電所取入堰堤となっている。集落に近く，クマがとれた良いマキグラ。
中の俣谷	左	名前のないクラ		冬場でも雪のつかない壁で，猟の始めにとりくむクラ。ゼンマイの良い採取地でもある。
西俣谷	左	黒壁		越前側でとりそこねたクマがいつく壁でホングラ。良くとれて効率の良いクラ。
	左		口大長（クチオオチョウ）　エーグラ	ウドワラ（ウドの群生地）周囲にはブナも多く，良いナーバタ・エーグラである。
	左	小倉（コクラ）		広さは狭いが，ふつうのマキグラである。
	右	柳（ヤナ）が倉		川筋に柳が群生しているので柳が倉，マキグラ。
三ッ谷川	左	豊右衛門（ブンニョモン）の天狗壁		下方部が車道に近くなってしまったので，クマがいつかなくなってしまったマキグラ。
柳谷・赤谷	左	シゲジ		春の積雪期，登山者は砂防新道コースをとって室堂をめざすので，クマは人を避け自然的に赤谷にはいるので，効率よくとれた。シゲジは汁鍋と同じく最奥のマキグラなので良くとれた。
	右	ナカヤマヒナタ		マサウチ（柾打ち）した自生桧の大木が尾根にある。
	左	〃　オンジ		
柳谷本流	左		オーバタのナーバタ	フキ・ウドの多い山菜採取地でもある。今は砂防工事でナーバタでなくなった。
	左		ウエダンドコのエーグラ	ブナの新芽･花にクマがつく。所々にナーバタがある。
	左		シタダンドコのエーグラ	ミズナラ・ブナの新芽・花にクマがつく。林の中にナーバタが散在する。
別当谷	右	笹倉		慶松平の真下。元の市兵衛茶屋の真上，スズタケが群生するクラで，よくとれたクラ。

表１　白峰村の猟師が出むいた猟場一覧　その２

谷筋		マキグラ（ホングラ・トマリグラ）	ナーバタ（エーグラ･ヤスンバを含む）	摘要
谷名	左岸・右岸			
柳谷本流	右	奥天井		尾根筋にシャクナゲが群生していたマキグラ。北美濃地震のときに大崩れが起り，シャクナゲも全部なくなりドベラになってしまい，マキグラでなくなった。往時は笹倉と大天井を一緒にカケマキし，笹倉の最上部を撃ち場とした。
	右	猿壁		市ノ瀬より最短のマキグラ。撃ち場は旧道のハンサ坂（イタギ坂ともいう）。谷の谷口と最奥の猟場は両方とも割りに多くとれた。車道開通でマキグラが上下に分断され猟場でなくなった。
湯の谷	右	大倉		大きい（幅広）壁で険しい。セコが登れるのは一・二ヶ所。壁にはイブキ（シンパク）が生えているのでイブキ壁ともいう。クマがとれないと盆栽用にイブキを採って帰る時もある。
			アラネ　エーグラ	クロバ（常緑樹）が少なく，クマを見つけやすい。大倉・アラネともに谷奥の猟場なので良くとれた。
	右		湯の谷のナーバタ	谷川に沿ってナーバタが細長く続いている。
	右	丸岡谷の滝		クマがお産をする場所らしく，毎年ニコ（子グマ）連れのクマをとる。お産には，良い穴があること，年中ショウズがでて水のきれいな所が最良といい，丸岡谷の滝周辺を適地と見ている。誰も穴のクマをとった例がない。けれども，一度に二組の親子グマをとったことがある。
	左	青森壁　トマリグラ		桧をはじめとしたクロバが細く，長く帯状に続いているクラ。昼間湯の谷のナーバタで餌を食い，夕方帰る時青森壁にはいる。またアラネをトマリグラにするクマもいる。
	左	指尾（サシオ）		普通のマキグラというより，出産するらしい穴があるクラ。
	右		ジョウゼンのエーグラ	花をつけるブナが多くあり，ブナにクマがつく。営林署がブナを伐採してしまった。
	右		ショウブ山のエーグラ	メガヤ・アザミ・オオウド・オオゼリが多く生え，クマが良い餌場とする。10回猟に行くと５回は必ずとれる良いエーグラ。
湯の谷	右		人足平（ニンソクダイラ）　イップクバ	クロバが点在し，クマが休憩する所だが寝泊りはしない所。
	右	鷲の巣（ワシス）		良くとれたマキグラ。
	右	サヨモ谷　ホングラ		市ノ瀬･赤岩の人間居住地に近いが，巻狩りをすると良くクマがとれた。湯の谷谷口にあり，春一番早く猟ができる。クラの下には山田屋のナーバタがあり，餌を食いに出る時もある。
	左　右		山田屋のナーバタ	山田屋とは白山温泉の旅館名。猟期には温泉は開業しておらず，近くのナーバタにクマがつく。右岸中心に左岸にもナーバタがひろがる。
	右		鳩の湯（ハット）　イップクバ	大水害以前鳩の湯という温泉があった。桧が数本自生しており，クマの通り道でクロバの陰で一休みする所。
牛首川	左		今宿（イマジュク）　イップクバ	スゲが生えているのでスゲ壁ともいう。スゲ自生地は壁の下にあり，水が冬でも少し落ちている。クマの通り道。
小三ッ谷	出合左岸		タノヘラ　イップクバ	
根倉谷	左	桧倉		越前側で猟をしてクマを逃がした時，多くは西俣谷黒壁か桧倉に隠れる。尾根筋の桧自生地を撃ち場とする。一般的に黒壁と桧倉を同じ日に巻く。
牛首川	右	コベが壁		河内の火葬場の下の壁，根倉谷発電所の真向いにあたる。コベとは小さい家のハナタレ女の子をさす。クマのいつく穴もある小さく狭いクラ。
宮谷	右 右	ハテガ倉　トマリグラ ヒョウシロ　トマリグラ		昼はショウブ山のエーグラで餌を食い夜はハテガ倉，ヒョウシロで寝泊りするらしい。一つ一つ巻く時もあれば，二つ一緒にしてカケマキする時もある。
	右 右 右	ノノ倉 水谷 箱の谷		湯の谷で猟をして逃げたクマは宮谷右岸のマキグラに逃げ隠れる。湯の谷で猟をした当日，または翌日に猟をする。
	支谷カナギ谷 右 左	カナギ谷ヒナタ 〃　オンジ		マキグラであるが　横広で獲りにくい猟場である。
	左	コロドメ		コロとは丸太のこと。川流しで運ぶため用材を貯える場所をコロドメという。シゲジ・ナナコバより下りてきたクマが，牛首川本流の水流が多い時渡れずこのクラに留まるらしく，良く獲れたマキグラ。

表１　白峰村の猟師が出むいた猟場一覧　その３

谷筋		マキグラ（ホングラ・トマリグラ）	ナーバタ（エーグラ･ヤスンバを含む）	摘要
谷名	左岸・右岸			
牛首川	左	ガッパ　通りクラ		キワラ（木原）で，クマがよく通る場所で，ヤスンバでもないし，マキグラでもない。足跡を見つけても猟はしない。秋にはナラの株にマイタケが多く生える。
牛首川	左		ソウスケノマ（撃ち場）	カケマキをした時，ノマの最高部を撃ち場とする。
	左	五郎四郎 平左衛門 細ノマ クツワ谷		車道の除雪前に猟をする。除雪前でも人が往来するのでクマは長く留まらず風嵐谷へ移動する。除雪前，一つ一つ巻く時もあれば，五郎四郎・平左衛門二つをカケマキする時もあれば，人数が多い時は三つをカケマキする時もある。
		センジャガ倉		倉と名前がついているがマキグラではない。クロバが適宜生えておりクマの隠れ場所のような所。
	左	天狗壁		壁は険しく，下よりはクマも人も登れない。壁の上，尾根を越すと小原山の出作りで人間居住地に近い。 クマは下よりも上からも壁に入れず，センジャガ倉より横に入ってくる。セコはゼンマイとりの時，猟の時に登りやすい所を見つけてある。タテマキのやりにくいクラで効率の良くないマキグラ。
	右		奥カラサマ　ヤスンバ	尾根筋のヤスンバでシャクナゲ群生地がある。
	右		カラサマ　ヤスンバ	
	右	セイヨモ壁		キャーノキ谷の左岸，「キャーノキ谷のマキグラ」とむきあっている。
	右	キャーノキ谷		キャーノキとは欅をさす。昔欅の大木があったと伝える谷。今は古株も見つからない。宮谷より動いてきたクマがいつくクラで，セイヨモ壁・キャーノキダン共に良くとれた。
	右	大沢		助内谷源流の壁。オオザワの下に「熊次郎」という屋号名のついた小平坦地・小屋場がある。マキグラの形をしているが，クマをとったことがない。兎が良くとれる。
大杉谷	右	奥シゲジ		宮谷で逃がしたクマが山越えしてはいっている時もある。ブナにクマがついて比較的良くとれる。
	右	シゲジ　ホングラ		下流部の谷筋にナーバタがあり，条件としては良い猟場。上方部にクラ，下方部にナーバタが組みあわさっているような環境の時ナーバタに対し「ホングラ」というよび方をする。ナーバタがなくクラ単独の時は「マキグラ」というよび方を使っている。
	右	棚倉		ブナにクマがつく。
	右	ミンジャの谷		ハチブセの谷と一緒にしてカケマキすることもある。
	右	ハチブセ谷　ホングラ		本流との合流付近はナーバタ。良い条件のホングラ。
	右	サワガジャラ		ハチブセ谷の奥にあり，狭いがマキグラ。
	右	七木場		昔より自生のマツ・ヒノキ等の良い木があり，クマの隠れ場としても良い条件のマキグラであったが，営林署が伐採して赤ヌケになってしまいマキグラでなくなった。現在はゼンマイ壁として利用している。
	左	横倉　トマリグラ		クマの良いトマリグラであったが林道がスイッチバックで二度横切ってしまいクラでなくなった。
北俣谷	支谷 イモイワ谷	イモ岩		マキグラの真中を，林道が開通して二分してしまい猟場でなくなった。
	右	八郎右衛門壁　ホングラ		下方部にナーバタ。壁にクマが居つく木穴･岩穴があって，最良条件のホングラ。出作りの最盛時は居住地より近いが良くとれた。
大杉谷			竹蔵のナーバタ	谷沿いにナーバタが長く続く。周辺のナラ・スギの木穴にクマがいつく。穴のクマもとれるし，ナーバタでもとれた。
風嵐谷	右	ヨモサ		シゲジ・ナナクラと下ってきたクマが大河を渡れないときヨモサにたまる。宮谷のコロドメと同じ条件の猟場で小さく狭いマキグラ。県道の車道よりもクマの動きを観察できる。
	支谷チエジ谷	チエジ倉		巻狩りをしたことが少ない。
	支谷ホイチ谷	ホイチ谷		巻狩りをしたことが少ない。
	右 左	スバルヒナタ 〃　オンジ		スバルとは谷が狭くなったり，岩魚釣りがさかのぼれない地形をいう。オトシカベ猟をするがとったことは多くない。

表１　白峰村の猟師が出むいた猟場一覧　その４

谷筋		マキグラ（ホングラ・トマリグラ）	ナーバタ（エーグラ･ヤスンバを含む）	摘要
谷名	左岸・右岸			
	左	新保谷		居住地よりも割と近く，広さも狭い。便利が良く猟もしやすく，良くとれるマキグラ。
風嵐谷	右	蔦倉（ツタ）		壁なので，冬雪つかない。新芽が外より早く芽吹き，一番早くクマがでるクラ。クマが穴より出たかどうか試し猟をするクラ。広く大きいので，多人数の時は10人，少ない時は５人位で，ヨコマキしてとる。効率の良いマキグラ。
	左	十兵衛山		周辺にクマにとって良い石穴があるらしい。居住地に近く，広さも狭いが良くとれるマキグラでカラマキが少ない。
	左	狐が倉		上部の尾根に松が10本位並んでおり，撃ち場とする。昔とったらしいが，あまりとれないマキグラ。
小又谷	左		土倉（ツチクラ）　エーグラ	谷川に沿ってススダケワラやウドワラが広がり，クマの良い餌場となっている。
		小又（オマタ）		ガンドワラの下方に位置する。クマの泊まらないクラであまりとれない。
明谷	左　右		滝の上のナーバタ	大滝上流に広がっているナーバタ。
	支谷松倉谷	松倉		小さいが良くとれるマキグラで，撃ち場にフクラシバが一株生えている。セコは急で登れないので壁の真下で大声でヨボってクマを追いあげる。とれない時は壁のイワヒバを採って帰る猟師もいる。
明谷	左	オージガ谷		二つのマキグラの下部は谷川に沿ってナーバタの餌場があり，ナーバタとマキグラがセットになった条件の良い猟場である。二つのマキグラを一緒にしてカケマキする時もある。良くとれる。
	左	コジャガ壁		
太田谷	支谷カクシ谷		市三郎山のナーバタ	
			太田のナーバタ	
	左		横倉のナーバタ	地元の人はヨソマツ山というが猟師はヨコクラといっている。
苅安谷			細谷のナーバタ	
大道谷	支谷横谷	ヤケオ		横谷のナーバタで餌を食いヤケオに泊まる。良くとれた壁。
	横谷		横谷のナーバタ	
	左		ヒラ谷のナーバタ	
	左		足谷のナーバタ	
蛇谷	左	蛇谷（ジャ）ヒナタ		ヒナタによくクマがとまる。北俣谷のハチロモ（八郎右衛門壁）でとりぞこねたクマがよくこのクラに逃げこむ。良くとれるマキグラ。
	右	〃 オンジ		
牛首川	右	捷二（ショウジ）泣キ		稀にとれる小さいクラで，スキー場建設でなくなった。
	左	臼谷		新保峠の下，地形上マキグラだがクマが泊まらない。
	左	サカイ谷		赤谷の赤倉でまくと逃げこんでくる。とった事例が少ない。ダム建設で猟場でなくなった。
百合谷	左	シシの口		地形上はマキグラ，シナノキのクマ穴もある。昔はとったらしいがクマが泊まらない。スキー場建設で猟場でなくなった。
大嵐谷	右	笹倉		ブナの芽・花にクマがつく。良くとれるマキグラでカラマキすることはなかった。
	支谷キャーデン	キャーデン		笹倉と一緒に横マキでカケマキする時もある。カケマキすると約２時間かかる。
		名前のないマキグラ		
	支谷ヨロイ谷	鎧（ヨロイ）		最上部の一部は百合谷にかかっている。鎧の胴のような形の急壁で登りにくい。足跡が倉の中にはいっていてもセコが動きつらく，とれにくいクラ。
	右	中山		青葉が多く生え，見通しの悪いマキグラで，猟師ではクスボッタクラと表現している。降りクラで３日程雨・雪が降り続いた後にいくクラだが，水量が増えているので渡河点を見つけるのに苦労する。

表１　白峰村の猟師が出むいた猟場一覧　その５

谷筋		マキグラ（ホングラ・トマリグラ）	ナーバタ（エーグラ･ヤスンバを含む）	摘要
谷名	左岸・右岸			
			大嵐のナーバタ	本流，中山より奥地の川筋に，広い範囲で長くひろがるナーバタ。
	支谷ナキ谷	トッサカ		人間がやっと歩ける壁で，技術の劣るセコは歩けないので，一般的に壁の真下で大声を発し追いあげる。
	右	ジョージ岩（別名滝の壁）		イシナ壁（人間がようやく歩ける岩壁）で急なのでセコが苦労するマキグラ。
	支谷 東バタ谷	東バタヒナタ 〃　オンジ		大嵐谷の最下流の猟場でクマにとって，宮谷のコロドメ，大杉谷のヨモサと同条件のトマリクラで良くとれる。３人で１度に３頭とったこともある。
小嵐谷		長巻		名前の通り，横長のマキグラ。１日かけて多勢でタテマキする。例としてセコ20人，鉄砲撃ち10人位で半日仕事で，ていねいにゆっくり猟をする。１度に３・４頭はとれる。
			長ヘラのナーバタ	マキグラの長巻とは谷はずれるが，長巻のマキグラと長ヘラのナーバタがセットになっているようなので，長巻で良くとれるらしい。
赤谷	支谷 オイハギ谷		オイハギ谷のナーバタ	アザミ群生地がひろがるナーバタで良くとれる。
	右		バイガ平のナーバタ	
	支谷滝の谷		滝の谷のヤスンバ	移動途中にいっぷくするのに都合良い杉・桧の根元に穴･木陰が多くある。いないと思っていると時々とれたヤスンバ。
	右		平四郎横谷のエーグラ	
	右		徳右衛門（トクヨモン）横谷のエーグラ（石倉谷）	餌の豊富なエーグラで良くとれる。
	支谷 徳右衛門横谷	石倉		小さいがマキグラで，徳右衛門横谷のエーグラとセットになっている猟場で，よくクマが泊まるクラ。
	支谷 シャクの谷	シャクの谷		マキグラのようであるが，トマリグラではなくヤスンバのような感じのクラ。
小赤谷			小赤谷のナーバタ	
	右	小赤谷倉		クラの名前がついているが高低差がなく横にひろがっており，撃ち場がない。クラというよりエーグラ。
赤谷	右	赤倉		二つのクラを一緒にしてカケマキ（タテマキ）をするときが多い。失敗するとクマはシャクの谷に逃げこんでとまる。
	右	十二ヶ滝		
下田原川	右	脇谷		小さいがマキグラ。
	右	兵井の向壁（ヒョウイ　ムカイカベ）		五葉松（キタゴヨウ）が多く生えている壁で，フリクラの傾向をもつクラ。
	右	名前のないクラ		
	左		松次郎山のナーバタ	川の真上に出作り小屋があるが川沿いのナーバタにクマがでる。
	左	タルビ		下田原の居住地に近いがよくクマが泊まるクラ。
	右	松尾		ダム建設で，下半部が水没してしまい猟場でなくなった。

表２　尾口村尾添領域猟場

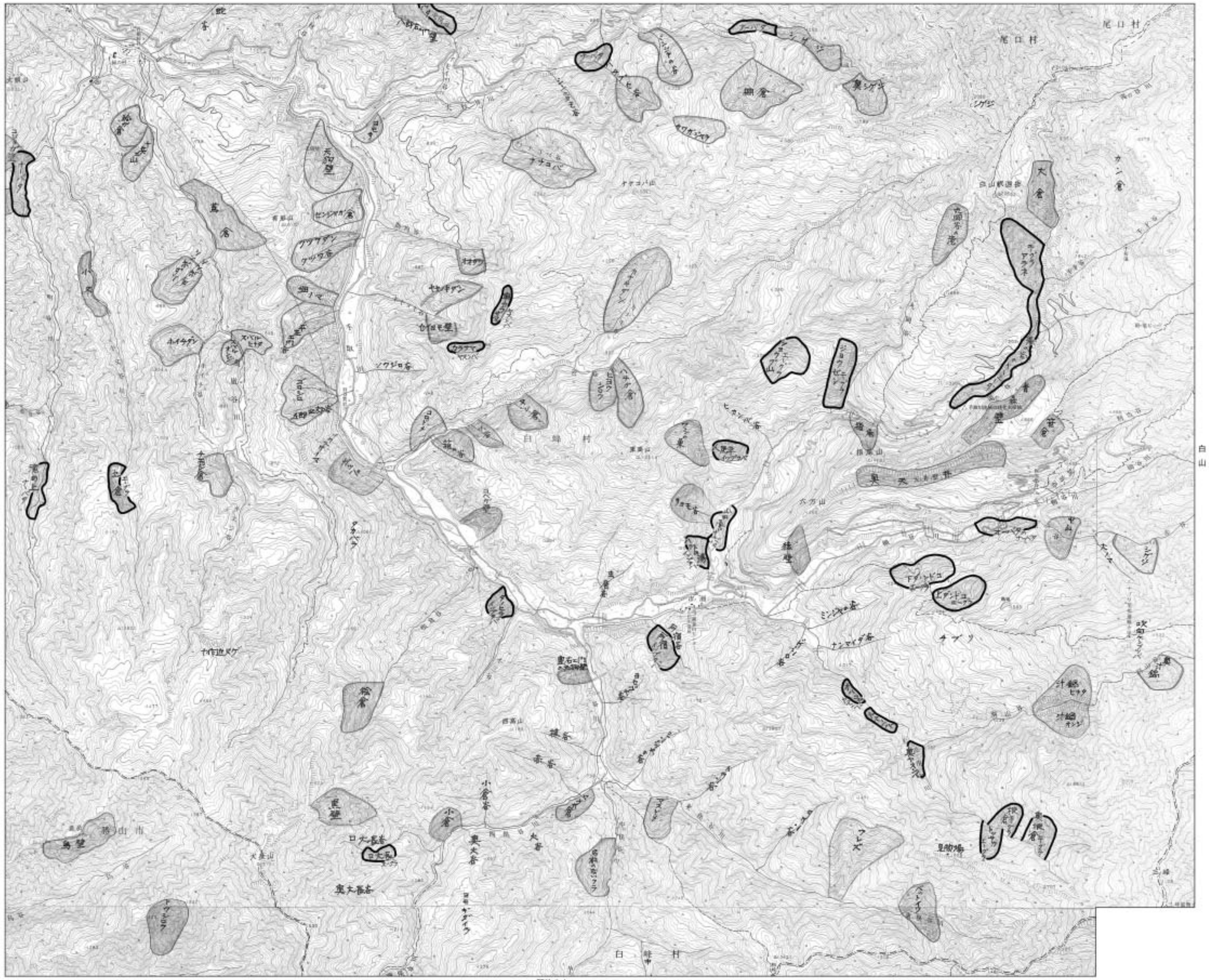
谷筋		マキグラ	ナーバタ	摘要
谷名	左岸・右岸			
目附谷	左	水晶壁		融雪期，岩間の氷がとけるとガラガラ落石を起こす。左岸より大声で叫び，右岸の白山道へ追いあげるオトシマキ猟をする。
	左　右	清水谷（虹滝ともいう）（ショウズ）		雪崩が谷をふさいでいる所を渡って対岸へいき，オトシマキ猟をする。クマがとれなかった時は与次のワサビ沢でワサビを採って帰る。
鳴谷	左		彦兵衛のエーグラ（ヒコベエ）	ブナの新芽・花にクマがつく。
	右	悪床（ワルドコ）		鳴谷出合より下流の悪床，新太郎等は尾添の猟師が狩りをしたので，白峰村の猟師は出合より上流，尾添組がはいらない場所へ出むいた。
目附谷	左	新太郎		
			滝の谷のナーバタ	尾添の猟師はガラ谷ともカラ谷ともいい，夏になると水が涸れる。
	支谷滝の谷			
	支谷兜谷	兜（カブト）		谷川筋はナーバタ，マキグラは両側にあり，良い条件の猟場。
	右	半右衛門オトシ（ハンニョモン）		
	左	タツガシラ		照りクラで，晴天が続いた後にいくと良くとれる。大嵐谷の笹倉，キャーデンで逃がしたクマはタツガシラに逃げこんでとまる傾向がある。融雪期に落石の多いクラ。
	支谷 ナメクジリ谷	シンスケ		遠くへ苦労してきた割に，多く取れないクラ。

表３　福井県領域猟場

谷筋		マキグラ	ナーバタ	摘要
谷名	山名			
滝波川	大長山	藤四郎（トウシロウ）		三ッ谷より出かけた猟場。
烏谷	烏岳	烏壁（カラスカベ）		三ッ谷より出かけた猟場。
滝谷	取立山	黒壁		三ッ谷・大道谷より出かけた猟場。
胡摩堂谷		オーショ		大道谷より出かけた猟場。現在は杉植林が進んでクマがよりつかない。
奥河内谷	谷峠	汁鍋		大道谷・五十谷より出かけた猟場。谷トンネル開通でクマがよりつかなくなった。
	中根峠	霞が尾（カスミオ）		五十谷より出かけたマキグラ。
杉山川	小豆峠	中野俣（ナカノマタ）		五十谷より出かけたマキグラ。

備考１　この表は，添付した２万５千分の１地形図に「白峰村の猟師が出むいた猟場分布図」の個々の猟場を解説する主旨で作成した。
備考２　「摘要」の文中にのせたオトシカベ猟とは，谷を挟んでヒナタ・オンジの二つのクラがある時，生息クマの数，雪庇の状態，獲物の運搬等を考慮して，どちらかのクラにクマを追い集めて猟をすること。またカケマキとは，水平方向にクラが並ぶ時二つ以上のクラを一緒にして巻狩りをすることをさす。
備考３　谷の慣用呼称は白峰村を含めた白山麓では「タン」または「ダン」である。だから猟場名については，厳密には「清水谷」は「ショウズダン」，「湯の谷のナーバタ」は「ユノタンのナーバタ」である。ここではひとつひとつ「タン」「ダン」としなかった。

図４　石川県白峰村の猟師が出むいた熊猟場分布図（1）



○は，ナーバタ，エーグラさらにはヤスンバ（イップクバ）を示す。

名称だけの表示は，マキグラを示す。

索引図

加賀丸山	白　峰	新岩間温泉
北　谷		白　山
越前勝山	願教寺山	二ノ峰

加賀市ノ瀬

国土地理院発行の２万5000分の１地形図「加賀市ノ瀬」および「白山」，「願教寺山」の一部を使用。

白　峰

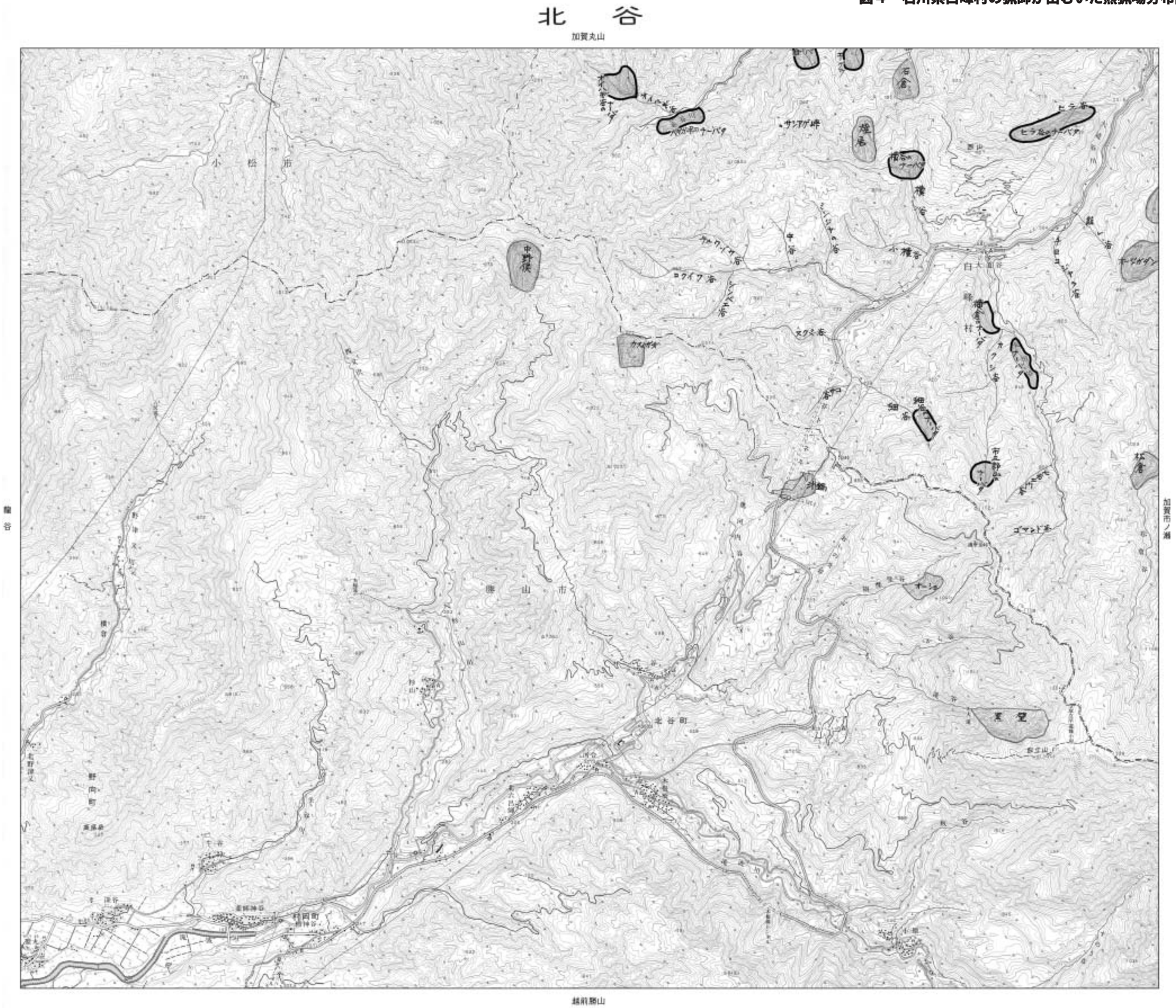
◯ は，ナーバタ，エーグラさらには
ヤスンバ（イップクバ）を示す。

名称だけの表示は，マキグラを示す。

白　峰

国土地理院発行の２万5000分の１地形図
「白峰」を使用。

図４　石川県白峰村の猟師が出むいた熊猟場分布図（3）



○は，ナーバタ，エーグラさらにはヤスンバ（イップクバ）を示す。

名称だけの表示は，マキグラを示す。

北　谷

国土地理院発行の２万5000分の１地形図「北谷」を使用。

図４　石川県白峰村の猟師が出むいた熊猟場分布図（4）

○は，ナーバタ，エーグラさらにはヤスンバ（イップクバ）を示す。

名称だけの表示は，マキグラを示す。

加賀丸山

国土地理院発行の２万5000分の１地形図「加賀丸山」を使用。